

し尿中非蛋白 N の著明な増加と蛋白 N の減少がみられ併用期に於ては単独期に比し尿中非蛋白 N 排泄の減少がみられ投与日数の増すほど著明であつた。又減少した非蛋白 N は主として尿中尿素排泄量の減少によるものであり尿素以外の N 分割は不変乃至不定の変動をとつた。

14) 病院内の病原ブドウ菌の動態

°斎藤三夫, 井口正己
原 章子 (葛飾日赤)

新生児, 未熟児室を中心に, 病院職員, 母親の病原性ブ菌を毎月1回連続して調べた。

コアグラゼ陽性ブ球菌は, 未熟児, 新生児に多く検出され, 型別可能菌も病院群に高率で, 院内交叉感染によるものと思われた。生後日数による陽性率は, 生後第4日目より急速に高率となる。未熟児, 新生児の型別菌の月別分布及び抗生物質感受性を見ると, 明らかな変動が認められ, 職員の交代と一致しており, 職員の保菌者が原因となることが判明した。又, この期間中発生した膿皮症, 化膿性唾液腺炎等のブ菌型別も, 職員の変動と一致しており, ブ菌感染症の原因がうかがわれた。

一方, 母親の型別菌は, その影響が少く, 従つて職員保菌者の速やかな検出と, 新生児の速やかな Rooming in が必要である。

15) 黒毛舌症の5例

小林 貞夫, 石川 恭子
°木下 精子 (東京厚生年金)

抗生物質使用に関係ありと思われた5例, 患者は3才より14才までの入院患者。発症までに使用した抗生物質は, それぞれ, バイシリン G, パラキシシン 9, アクロマイシン 13, ケミセチン 1日間, 及び諸種抗生物質を約40日間使用した1例である。舌苔の色調は黒褐色より黄色に及び, 黒毛舌期間中にも, その色調を変じうるものの様である。黒毛舌期はそれぞれ4, 21, 14, 7, 17日である。自覚症状は特に訴えられない。舌苔の培養により *Candida* その他の真菌類を検出したのは2例である。治療として, イベルザールトローチ, ピオクタニン塗布, ビスラーゼ注を行つたが, 殆んどの例において抗生物質使用中により治癒するものの様である。2例において, 原因と思われた抗生物質により誘発を試み, うち1例にバイシリン G 4日使用後発症をみた。

16) 小児急性脾炎の1例

神田 勝夫, °倉持正昭
(君津病院)

13才男児。上腹部の激しい持続痛を主訴とし上腹部に脾臓部と一致する腸詰様の腫瘤が触れ圧痛が著明であつた。検査成績では著明な白血球増多, 血沈の高度の促進があり, 血清ジアスターゼ16単位, 尿中ジアスターゼ32単位, 血糖値110 mg/dl で正常範囲内にあつた。十二指腸液のジアスターゼ値は40単位でかなり低下して居り, 又桿菌及び双球菌が証明され, 虫卵陰性。抗生物質, 鎮痛剤, 脾液分泌抑制剤, 絶食次いで無脂肪食療法を行ない, 自発痛は3日目, 圧痛は5日目に消失, 腫瘤は50日目頃より触れなくなり, 64日目に全治退院した。

以上 Paxton & Payne の分類の第5型に相当する小児急性脾炎の1例を報告した。

16') 先天性胆道閉塞の診断について

(1症例から)

西宮 芳之助 (秋田日赤)

逆流性黄疸で, 血清ビリルビン値が動揺し便のビリルビン反応が常に陽性であつた事から所謂「乳児肝炎」のカテゴリーに属するものと診断し, 一応手術適応外と考え, 且つ又初めの肝生検でも所謂「乳児肝炎」の所見を得ましたので, 開腹せずに経過を見ている中に肝硬変で死亡した例を経験しましたが, 剖検によれば手術可能型に属する先天性胆道閉塞があり, 若し速やかに開腹してをれば生命を救い得たかも知れず, この点, 最近多く用いられるようになった「乳児肝炎」と云う病型に惑わされる事なく, 少しでも疑わしい点があれば積局的に試験開腹をする必要のある事を痛感した。

17) 小児甲状腺癌の1例

石 井 博 (千葉大)

初診時, 8才の女児, 昭和32年7月, 前頸部の腫瘤で当科を訪れたが, 甲状腺機能は正常, 単純性甲状腺腫の疑いでヨードカゼインを与えたが, 雀卵大の腫瘤は変化なく, その後幾分大となり, 頸部リンパ節も4箇触れるに至つた。昭和34年末頃より喘鳴, 嚔声, 呼吸困難があらはれ, 胸部レ線写真で全肺野に粟粒の陰影を見, 頸部気管のレ線写真で, 声帯より下部に著明な狭窄を認め, 甲状腺シンチグラムでは, 腫瘤に相当した部に欠損を認めた。レ線照射及び気管切開による呼吸困難の軽減をはかつた。